

助動詞「たり・り」確認テスト（完了・存続） | 定期テスト対策 | 誰でも古典塾

解答・解説

問1 (1) 完了・存続の助動詞「たり」。(2) 連用形。「光る」(四段)の連用形が「光り」で、「たり」は連用形に付きます。

問2 終止形。文がここで言い切られているので終止形です。

問3 (例) 筒の中が光っている。／筒の中が光った。(「たり」は完了「光った」とも存続「光っている」とも訳せますが、ここは光っている状態が見えている場面なので存続「光っている」が自然です。)

問4 (1) 連用形。「ゐる」(ワ行上一段)の連用形は「ゐ」です。(2) 終止形。文末で言い切っているため終止形です。

問5 どちらも**存続**。「紫がかっている雲」「(細く)たなびいている」と、状態が続いているようすを表すので存続でとります。

問6 (1) 助動詞「り」。(2) 存続。「おごり高ぶっている人」と、その状態が続いていることを表すので存続です。

問7 已然形。「おごる」は「おご-ら/り/る/る/れ/れ」と活用する四段動詞で、その已然形「おごれ」に「り」が付いています。

問8 おごり高ぶっている人も長くは続かない。「(久しからず)＝長くは続かない」

問9 長くとどまっている例(ためし)はない。

問10 (例) たいそう降り積もっている雪。「降れる」を存続にとると「降っている・降り積もっている」となります。)

問11 言えない。「ある」はラ変動詞「あり」の連体形そのものであり、存続の「り」が付いた形ではありません。「り」は**サ変の未然形・四段の已然形**にのみ接続し(いわゆる「サ未四已」、問16参照)、ラ変には接続しません。(仮に已然形「あれ」に「る」を付けても「あれる」となり、「ある」にはなりません)

問12 伝聞・推定の助動詞「なり」。理由：直前の「す」がサ変動詞の**終止形**だから。伝聞・推定の「なり」は終止形(ラ変型には連体形)に接続します。

問13 **断定**の助動詞「なり」の連体形。「三寸ほどである人」の意味で、「なり」は「に+あり」が縮まってできた断定の助動詞です。体言や連体形に接続します。

問14 「書きつくれる」。四段已然形「書きつくれ」に「り」が付き、連体形「る」となります。

問15 助動詞「り」は**四段動詞には已然形**に接続するから。「咲く」「降る」はどちらも四段動詞で、その已然形「咲け」「降れ」に「り」が付いています。(直前が「エ段+り(る)」になるのが目印)

問16 助動詞「り」は、**サ変動詞の未然形と四段動詞の已然形**に接続する。頭文字をとって「サ未四已(さみしい)」と覚えます。(例：サ変「す」→「せ+り」、四段「行く」→「行け+り」)

問17 連用形。「たり」は活用語の連用形に接続します。

問18 ラ変型。活用は「ら・り・り・る・れ・れ」(未然形・連用形・終止形・連体形・已然形・命令形)。

問19 (例) 接続を見る。完了・存続の「り」はサ変未然形・四段已然形にしか付かず、直前は「エ段＋り(る)」になりやすい。一方、断定の「なり」は体言や連体形に付く。直前の語の活用形・品詞を確かめれば見分けられます。

問20 (1) 断定の助動詞「たり」(～である)。「兵たり」＝「武士である」。(2) 接続が違う。存続の「たり」は活用語の連用形に付き(例：「光り＋たり」)、断定の「たり」は体言に付く(例：「兵＋たり」)。直前が連用形か体言かを見れば区別できます。

問21 ①完了…「～た・～てしまった」。②存続…「～ている・～てある」。文脈で訳し分けます(動作が終わった点に重きを置けば完了、結果の状態が続く点に重きを置けば存続)。